はじめに

『グリム童話』として世界に知られるヤーコプ・グリム (1785-1863 年) とヴィルヘルム・グリム (1786-1859 年) が共同で編纂した『子どもと家庭のための昔話集』(以下『昔話集』と略す) は、研究史においてはこれまでさまざまなキーワードと共に語られてきた。例えば、民話 (Volksmärchen)——創作昔話 (Kunstmärchen)、書きかえ／昔話の信憑性、時代の刻印、性差別／フェミニズム、残酷さ、等々である。

なかでも書きかえ／昔話の信憑性という問題は、グリムの昔話が民話 (Volksmärchen)——創作昔話 (Kunstmärchen) の間のどこに位置するのか、ということとも関連して、しばしば議論されてきた。そもそも『昔話集』の序文には、昔話を忠実に収集したというグリム兄弟の方針が示されており、初期の研究では、彼らが昔話の忠実な収集に先鞭をつけたとして『昔話集』は高く評価されていた。ところがその後民俗学が発展し、昔話が実際に厳密に集められるようになると、グリム兄弟が改版の過程で昔話に手を入れているからという理由で、グリム兄弟の『昔話集』には「信憑性」がないという批判を浴びることになった。その上、グリム兄弟による加筆は時代の規範に捉われており、それは例えば性差別を助長しているとして、20 世紀後半にはさらに批判の対象とされてきたのであった。

改版の過程でグリム兄弟の昔話は確かに、残酷さが弱められ、道徳的になり、市民 (Bürger) の子どもが読んだり聞いたりするのに適したものに変えられたという側面はある。ところが『昔話集』全体を見渡してみれば、全てが説教臭い子ども向けの安全な話にされてしまったわけではなく、非常に人間臭い話も数多く掲載されている。例えば、願い事を叶えてくれると言う神の申し出に対し、「天国に行くこと」を願う敬虔な夫婦がいる一方で、必勝トランプと必勝さいころをもらう賭博きちがいの男が登場する。また、妊娠という状況が加筆によって隠された話がある一方で、不倫——その試みは失敗するのだが——がユーモラスに描かれている話もある。つまり、時代の要請に合わせて子ども向けに書きかえられる傾向が認められるにしても、その傾向から見れば書きかえられていても不思議ではないものが、『昔話集』にははっきりと残されているのだ。

本論では、これまでのグリム昔話研究では着目されて来なかった、書きかえられていない側面を考えていきたい。なぜなら、そうした箇所に、グリム兄弟の昔話観が如実に現れていると思われるからである。

そのためにはまず、グリム兄弟の加筆の傾向を全体として把握しておく必要があるだろう。

グリム兄弟による加筆についての研究が本格的に始められたのは、およそ 1 世紀前である。初期の重要な研究であるトヌラの詳細な論文 (1912 年) はフランス語で書かれているため、これまで日本では全くと言ってよいほど言及されていない。さらにトヌラが考察の対象外とした、刊行前の手稿と初版の比較を行ったフライタークの論文 (1929 年) もドイツ語ではあるが、博士論文であるために同様に看過されてきた。本論第 I 部では、その両者とさらに他の研究者の指摘も混ぜながら、具体例をもって、グリム兄弟による加筆をいくつかの論点に整理しながら考察していく。それによって、グリム兄弟が『昔話集』をどのように書きかえたのかということの全体像が掴めるはずである。より詳細な具体例は、

今後の研究のための資料となるべく、別冊資料に掲載した。そうして加筆の全体像を掴むことにより、どのような箇所が書きかえられずに残されているのかも明確となるだろう。

だが、グリム兄弟が、時代の要請に合わせて子ども向けに書きかえても不思議はないそうした話に、なぜ手を加えなかったのかということは、ひとえにグリム兄弟の昔話観にかかわっていると言えるだろう。なぜならグリム兄弟は、昔話を神話や古い時代の文学と結びつけて考えていたからである。それにもかかわらず、グリム兄弟が昔話のどのようなところに「神話」の残滓を見出していたのかということは、これまで包括的に言及されることはなかった。しかし『昔話集』に付けられた『注釈篇』(第 3 巻) や兄ヤーコプの著した『ドイツ神話学』を詳しく考察していくと、グリム兄弟が非常にささいなことにまで神話の残滓、伝承とのつながりを見出していたことが分かるのだ。グリム兄弟は、ゲルマン神話との関連で、『エッダ』やサガとの共通点を指摘するだけでなく、さらには中世の叙事詩との関連などにも言及をしている。しかもグリム兄弟に特徴的なのは、そうした神話や伝承とのつながりの範囲をドイツに限定していないことである。つまり、グリム兄弟が想定していたつながりの範囲はインド・ヨーロッパなのだが、こうした捉え方は、グリム兄弟が生きた時代の思潮とも深く関連している。その時代とは、ちょうどインド・ヨーロッパに共通の祖語の実証が試みられた時代でもある。とりわけ兄のヤーコプは『ドイツ文法』で「グリムの法則」を発表するなど、積極的にその議論にかかわっていた。そして昔話の場合にも、やはり同じようにインド・ヨーロッパに共通の源が存在したと仮定していたのである。だからこそ『注釈篇』(第 3 巻) において、『ラーマーヤナ』などの古代インドの叙事詩と自分たちの集めた昔話との関連まで視野に入れた言及をしているのだ。

そうしたグリム兄弟の「昔話—神話観」に照らしてみれば、書きかえられることなく『昔話集』に収録されている話の中に、グリム兄弟が「神話」的なものを見出していたことが推察される。ここでは「神話」と一括りに言っているが、この場合ゲルマン神話に限定しているのではなく、中世の叙事詩や民衆本だけでなくインド・ヨーロッパという共通の源が想定される域内に現れている伝承のつらなりも含めた意味で用いている。そうした広い射程で、グリム兄弟は昔話を捉えていたのである。

それゆえ本論の中心となる第Ⅱ部では、これまで殆ど言及されて来なかったそういった考察を行うことで、『昔話集』の編纂にも大きな影響を与えていると思われるグリム兄弟の「昔話—神話観」を、その広大な関連において浮かび上がらせて行く。

第Ⅲ部では、それらをふまえて、グリム兄弟と同時代の昔話集やそれ以前に刊行された昔話集との比較を行い、グリムの昔話の独自性を探っていく。その際に、第Ⅰ部で取り扱ったグリム兄弟による書きかえの特徴に照らして、考察を進めていく。

『昔話集』は書きかえられているため、忠実な再録である「信憑性」のある民話とは言えない。とはいえ、描写の多さなどの観点から他の創作昔話との比較をしてみれば、作者によって創り出された創作昔話とは、明らかに一線を画していると言わざるを得ない。つまりグリムの昔話は、民話——創作昔話という両極のカテゴリーには収まりきらない、独特のスタイルを持っているのである。そのためそれはこれまで、「本になった昔話」(Buchmärchen) もしくは「グリムというジャンル」(Gattung Grimm) という呼び名を生み出

しもしたのであった。

そういったグリムの昔話の特質を明らかにしていくためにも、第Ⅲ部では、ヨーロッパにおける「昔話集」の嚆矢と言われるイタリアのストラパローラの『楽しき夜毎』など日本ではほとんど紹介されていない昔話集の紹介も兼ねながら、それに続くバジーレ、フランスのペローやオーノワ夫人、ドイツのムゼーウスやハウフ、ベヒシュタイン、ティークらが集めた (あるいは創作した) 昔話との比較を行うことで、グリムの昔話の独自性を探っていく。

グリム兄弟は、一般には『昔話集』(1812-57 年) や『ドイツ伝説集』(1816-18 年)、『ドイツ語辞典』(1852-62 年) の編纂者としてその名を知られているが、現在刊行中の全集が全 48 巻となるほどの、非常に多くの著作を残している。兄ヤーコプには、「グリムの法則」で知られる『ドイツ文法』(1819-37 年) の他、『ドイツ法古事誌』(1828 年)、『ドイツ神話学』(1835 年)、『古判例集』(1840-78 年) など、弟ヴィルヘルムにも『古代デンマークの英雄歌、バラード、昔話』(1811 年)、『ドイツ英雄伝説』(1829 年) などの著作がある。とりわけヤーコプのものは、いずれも大部の著作である。

その研究領域も、昔話から、文法、神話、法律などと多岐にわたっている。しかしグリム兄弟は、それらはみな「民族の初期の段階に同一の源から生じた」(J. Grimm 1965a Bd. 1 S. 400) ものであり、互いに関連し合うものだと考えていた。つまりグリム兄弟は、それらを分け隔てることなく、包括的な研究として行っていたのである。ヤーコプは、『ドイツ神話学』第 2 版序文の最後にこう記している。

> ある研究は、私にとって別の研究となった。あちらで立証したことがこちらで裏付けとなり、こちらで築いたものがあちらでの立証の役に立つというように (J. Grimm 1992 Bd. 1 S. XLI)。

その『ドイツ神話学』においては、グリム兄弟自身が集めた昔話や伝説に関する言及が随所に見られ、ヤーコプが実際に昔話を神話の残滓と捉えていたことが伺われる。同様にヴィルヘルムも、『昔話集』に付けた前書き (Einleitung) の中で、神話との関係に言及している。

しかも何より上記の言葉が示しているように、そのつながりは昔話——神話に限定されてはいない。今後のグリム『昔話集』研究は、兄弟の研究全体を包括的に視野に入れるような方向に進められる必要があるのだろう。本論ではその第一歩として、まずは特につながりが強いと見られる「神話」と昔話を対峙させることで、『昔話集』のさらなる特質の一面を浮かび上がらせてみたい。